広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XX 2008. 3. 22

家庭の音楽的環境と音楽の習い事

－幼稚園児の歌唱能力との関連－

水 﨑 誠
（北海道教育大学函館校）

目 的

幼稚園で教えていない曲を保育者が歌い始めると、それに合わせて歌い始める子どもの姿に出会うことがある。この姿は、幼稚園以外のどこかで子どもが歌を覚えて歌っていることを端的に示すものと考えられる。一般的に、幼稚園に通う子どもは園以外で過ごす時間が多い。幼稚園が終われば、家庭で過ごす者もいれば、習い事に行く者もいるであろう。こう考えれば、幼稚園以外で子どもがどのような家庭の音楽的環境（以下、音楽的環境）のもとで生活しているのかを明らかにすることは、保育において家庭と連携した歌唱活動を考える上での基礎資料となる。また音楽的環境と音楽の習い事を歌唱能力と関連づけて検討することは、歌唱行動の実態を把握する上での基礎資料となる。このような問題意識から、本研究の目的として以下の3つを挙げる。

第1の目的は、幼稚園年長児の音楽的環境の特質について明らかにすることである。先行研究を参考にして質問紙を作成して明らかにする。先行研究では「親が子どもと歌うこと」について、頻度や内容を尋ねているだけであった（Atterbury & Silcox, 1993；Kirckpatrick, 1963；Persellin, 2006）。したがって、「必要と考えているのか」や「良いことだと捉えているのか」について尋ねていない。自分の子どもにとって「とても必要だ」と考えて歌っている親がいる一方で、「あまり必要ではない」と考えて歌っている親もいるかもしれない。子どもと歌うことに対する親の考えを明らかにすることにより、音楽的環境についてより詳細にアプローチできると考える。

第2の目的は、歌唱能力が高い子どもとあまり高くない子どもの音楽的環境にどのような違いがあるかを明らかにすることである。Atterbury & Silcox（1993）は、幼稚園児の歌唱能力と音楽的環境について検討した。対象児は「前歌い手（presinger）」と「歌い手（singer）」であり、音楽的環境は親を対象とした質問紙によって調べられた。質問項目は、「お子様と一緒に歌を歌ったり、歌いかけたりすることを続けていますか」や「間違った音を訂正したり、難しい箇所を教えたりしてお子様の歌唱の発達を手助けしていますか」など13項目であった。その結果、音楽的環境調査の得点の平均値は「前歌い手」よりも「歌い手」の方が有意に高いことを示した。この結果から、歌唱能力が高い子どもとあまり高くない子どもの音楽的環境には違いがあること、すなわち、歌唱能力が高い子どもはより豊かな音楽的環境のもとで生活していることが明らかになった。しかしこの研究では、音楽的環境調査の得点の差について言及しているだけであり、質問項目のすべてで差があったのか、それとも部分的であったのかは明らかにされなかった。したがって本研究では、音楽的環境のどの側面で差があるのかを明らかにしたいと考える。

第3の目的は、音楽の習い事が歌唱能力に有益な影響を及ぼすかどうかを明らかにすることである。就学する前から、ピアノやエレクトーンなどの習い事を始める子どもがいることはよく知られている。このような音楽の習い事によって歌唱能力が高まるのだろうか。水﨑（2007）は、幼稚園年長児の無伴奏歌唱の分析によって、音楽の習い事の影響について検討した。歌唱能力の測定曲には「メリーさんのひつじ」を用い、曲中のすべての音高を測定して、正確かどうかを検討した。その結果、音楽の習い事をしている群の正確な音高で歌えた数の平均値と、習い事をしていない群の平均値との間に有意差は認められなかった。このことから音楽の習い事をしていることが、歌唱の正確さに有益な影響を及ぼす可能性は低いことが明らかになった。音楽の習い事の影響については、基礎研究の数が少なく今後の検討が必要である。

方　法

質問紙調査

【対象者】北海道函館市内のＡ幼稚園に通う年長児（５、６歳児）を持つ母親31人であった。

【内容】母親自身について、「音楽の習い事の経験」、「歌の好意度」（４件法：とても好き～まったく好きではない）、「歌う頻度」（４件法：よく歌う～まったく歌わない）の３項目を尋ねた。母親と子どもとの関わりについて、「子どものためのCD（カセット）の数」、「昨年度、子どもとコンサートに行った回数」、「昨年度、子どもとカラオケに行った回数」、「子どもと一緒に歌うことの必要性」（５件法：とても必要だ～まったく必要ではない）、「子どもと一緒に歌うことへの意識」（５件法：とても良い～まったく良くない）、「子どもと歌う頻度」（５件法：ほとんど毎日～ほとんどない）の６項目を尋ねた。最後に「子どもの音楽の習い事の経験」を尋ねた。なお「子どもと歌う頻度」が「ほとんどない」と回答した者以外には追加で４項目の質問をした（質問文は、結果の提示を参照）。質問紙は担任から園児に手渡され、母親に配布された。回収は、担任保育者に依頼した。質問紙は2007年２月22日に配布され、３月２日までに回収された。

歌唱能力調査

【対象児】Ａ幼稚園の年長児（質問紙調査を行った母親の子ども）30人（男子15人、女子15人）であった（当日欠席の者１人は除いた）。

【測定曲】「きらきらぼし」を用いた。選曲理由は、既知の曲である、音域が狭い、曲が短いことから対象児にとって歌いやすいと考えられたことによる。

【歌唱練習】先行研究（水﨑、2002、2007）と同様に、測定曲を思い出してもらうために事前の歌唱練習を行った。内容は、筆者のピアノ伴奏でクラス全員で歌唱するものであった。トレーニング的な内容は一切含めず、また歌唱練習の効果が出ないように、クラスの歌声を聞きながら最低限にとどめた。歌唱練習時の調は、吉富（1983）による５歳児の「歌唱可能声域」（Ａ３～Ｂ４）を考慮してC majorにした（音域はＣ４～Ａ４）。

【手続き】対象児の所属する園の静かな部屋（遊戯室）で個別に行った。測定は、筆者１人で行った。対象児は立った状態でグランドピアノの椅子に座った筆者と対面する形をとった。マイクスタンドに立てたマイクロフォン（SONY ECM-959DT）とポータブルDATレコーダー（SONY TCD-D10）で歌声を録音した。通常、保育で対象児が経験する歌唱活動は、クラス全員で歌うことであったため、１人で歌うことに緊張し不安を感じて十分に歌えないことが考えられた。このため、課題の前にリラックスさせるねらいで次のような手続きをとった。対象児には、まずはじめに「自分の名前」、「誕生日」、「年齢」を質問した。次にウォーミングアップソングとして、筆者が両手でピアノ伴奏をしながら（右手は旋律）、「チューリップ」、「かえるのうた」、「きらきらぼし」を２回ずつ対象児とともに歌った。３曲とも調はC majorであった（音域はＣ４～Ａ４）。「きらきらぼし」については対象児に歌詞と旋律を思い出してもらうねらいも兼ねていた。そして、無伴奏歌唱の課題に入った。課題は２回行われ、より正確に歌えた方（途中で止まった場合は、すべて歌えた方）を対象児のデータとした。調査は2007年２月１日に行われた。なお、筆者は2006年４月から対象児クラスの観察を続けており、ラポールの形成は十分にできていたと考える。

【音高の測定】分析ソフトには、KAY Real-Time Pitch Version 3.1.2（分析が困難なところに限り、KAY CSL Model4500 Version3.1.6）を用いた。測定箇所は、音高曲線の音の始まりと終わりを除外し、真ん中の安定した箇所にカーソルを合わせて測定した。測定結果は、小数点第２位までを記録し、その結果をもとに音高＋cent値に変換した。Ｃ４＝24として（半音ごとに±１）数値化した。

【正確な音程の判定】対象児が歌ったすべての音程を算出し、それを正確な音程と比較して逸脱の値が±50cent以内であれば正確に歌ったと判定した。歌詞の間違い（たとえば「ほしよ」を「ほしを」と歌う）は無効データとせず、間違った歌詞で測定した。逸脱許容値を決めるにあたっては、先行研究（Flowers & Dunne-Sousa, 1990；水﨑、2002、2007）に従った。

結　果

分析対象

質問紙は、配布数31のうち回収数は30であった（回収率97%）。この中には、本来答えるべきところを答えていないものもあったが、該当箇所が追加質問（問９）であったこと、また分析対象数をできるだけ多く確保したいことからすべてを有効データとした。歌唱調査は、対象とした30人のうち、すべての対象児が測定曲を歌うことができた。課題の前に対象児をリラックスさせ、測定曲を思い出すように配慮したことが、この結果に結びついたのかもしれない。本研究では、質問紙が回収でき、かつ歌唱能力調査も受けた者29人（男子14人、女子15人）を分析対象とする。

質問紙調査の結果

お母様自身について

問１「今までお母様は音楽に関連する習い事をしたことがありますか」は、「ある」17人（59%）、「ない」12人（41%）であった。音楽の習い事をしたことがある者は50%を超えていた。「ある」と回答した者について、音楽の習い事の種類を尋ねた（複数回答可）。その結果、「ピアノ」11人、「エレクトーン」３人、「オルガン」４人、「クラリネット」、「お琴」が２人ずつ、その他、「フルート」、「マンドリン」、「ギター」が１人ずつであった。現在の状況を尋ねたところ、お琴と答えた対象者１人だけが現在もまだ習っていた。この結果から、本研究の対象児は歌を専門的に習った事のある母親の子どもではないことが示された。

問２「お母様ご自身は歌うことは好きですか」は、「とても好き」14人（48%）、「まぁ好き」13人（45%）、「あまり好きではない」２人（7%）であった。「とても好き」と「まぁ好き」を合計すると90%を超えており、全体的に好意度が高いことが示された。

問３「現在、お母様ご自身は、どれぐらい歌っていますか（口ずさんでいますか）」は、「よく歌う」12人（41%）、「時々歌う」14人（48%）、「あまり歌わない」３人（10%）であった。「よく歌う」と「時々歌う」を合計すると90%であり、全体的によく歌ってることが示された。

お母様のお子様との関わりについて

問４「ご家庭にお子様のためのCD（カセット）はおよそ何枚（何本）ありますか（数の記入）」は、もっとも多かったのが「10枚」12人（41%）であり、次が「5枚」４人（14%）であった。その他、「２枚」、「50枚」が２人ずつ、「３枚」、「６枚」、「７枚」、「８枚」、「９枚」、「20枚」、「30枚」が１人ずつであった。「０枚」は２人であり、93%の家庭には子どものためのＣＤ（カセット）が１枚（１本）はあることが示された。

問５「昨年度、お子様と一緒にコンサート（音楽会や音楽の催し）におよそ何回行きましたか（数の記入）」は、結果を図1に示す。「０回」は４人だけであり、86%の母親が子どもとコンサートに１回は行っていることが示された。

問６「昨年度、お子様と一緒にカラオケにおよそ何回行きましたか（数の記入）」は、結果を図２に示す。「０回」17人（59%）と、「１回は連れて行ったことがあるとする者」12人（41%）とほぼ２分されている。回答の中には、「20〜30回」と他とはかなり異なったデータも示されている。１年間、すなわち12ヵ月の中で20〜30回は、およそ月に１回以上は行っている計算になる。生活の中にカラオケが浸透していることが分かる。カラオケの実態については、先行研究では明らかにされていなかったものであり、本研究ではじめて明らかにされた。

問７「お母様がお子様と一緒に歌うことは必要だと思いますか」は、「とても必要」12人（41%）「必要」16人（55%）、「どちらでもない」１人（３%）であった。「とても必要」と「必要」を合計すると97%であり、全体的に必要性が高いことが示された。

問８「お母様がお子様と一緒に歌うことは良いことだと思いますか」は、「とても良い」22人（76%）、「良い」７人（24%）であった。歌うことに対しての評価が非常に高いことが示された。

問９「現在、お母様はどのくらいの頻度でお子様と一緒に歌っていますか」は、結果を図3に示す。もっとも多かったのは「ほとんど毎日」11人（38%）で、次に「週に３～４日」８人（28%）であった。「ほとんど毎日」と「週に３～４日」を合計すると、66%でありおおむねよく歌っていることが示された。

追加質問：お母様のお子様との関わりについて

問９で「ほとんどない」を選択した者以外に、４つの追加質問をした。28人が該当したが、このうち４人はすべての質問に答えたわけではなかった。以下、それぞれの項目の回答者数を述べて、結果を示す。

問９Ａ「お子様と一緒に歌うときには、１日に何分ぐらい歌いますか（数の記入）」は、24人の回答であった。結果を図４に示す（「10～20分」の回答は「15～30分」に含めた）。「２～10分」で67%を占めている。歌う時間そのものは、短いものであると言える。なお「その他」１人は、「５分以内を日によって２セット～10セットくらい、遊びの中でうたうので一概にいえません」であった。

問９Ｂ「お子様の歌い間違い（歌詞、音程、リズムなど）を直すことはどれぐらいありますか」は、25人の回答であった。「時々直す」20人（80%）であり、「あまり直さない」５人（20%）であった。歌い間違いを直す者が大半であることが示された。

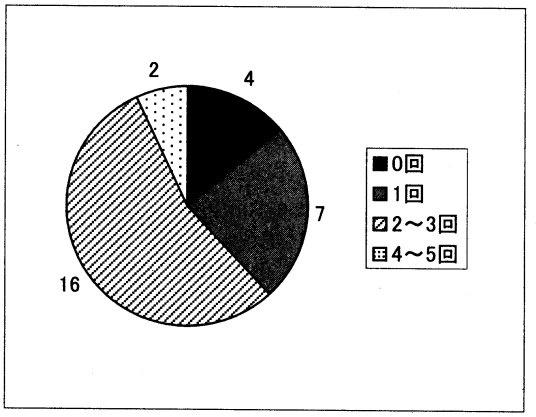

図１　コンサートに連れて行った回数（昨年度）

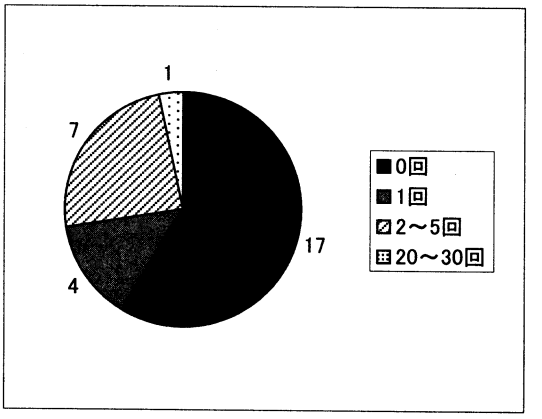

図２　カラオケに連れて行った回数（昨年度）

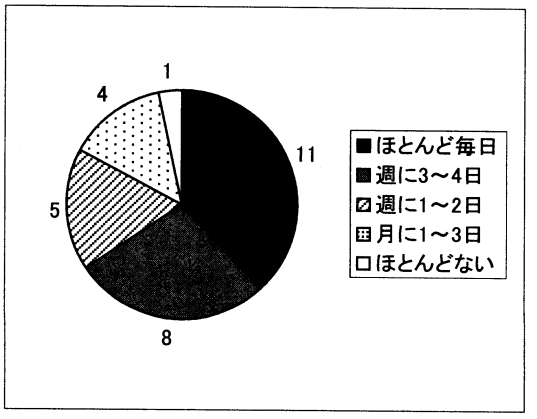

図３　子どもと歌う頻度

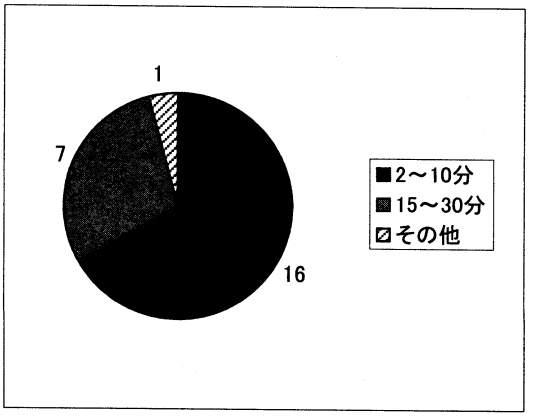

図４　子どもと歌う１日あたりの時間

問9C「何のためにお子様と一緒に歌っていますか（自由記述であり複数回答可）」は、回答が困難であると予想されたため、例として「ことばを増やすため、歌を通して親子のふれあいをするため」を挙げて質問した。28人の回答であり、うち3人が「特に目的はない」と回答した。何らかの目的を示した25人の回答は、その内容に基づき筆者によって主に2つに分類された。1つ目は「親子のふれあいや子どもが楽しむ」であり16人であった。「親子の交流、子どもが喜ぶから」、「子供が気分がよくなる。楽しい気分になる」などがあった。2つ目は、「歌うことを通して得られる知識や力」であり8人であった。「大きな口を開けて、歌うことをはずかしいと思わないようにしたいと思っています」、「娘ははずかしがりで大きな声で人にはなしかけられない。発声をきちんとしておきたい」、「昔からの童謡をたくさんおぼえてほしいからです」などがあった。これらの結果から、母親と子どもが歌うその目的に、知識や力よりも心情を重視していることが示された。

問9D「お子様と一緒に歌うことは、お子様にとってどのような良いことがあると思いますか（自由記述であり複数回答可）」もまた、例として「心が落ち着く、歌を好きになる」を挙げて質問した。27人の回答であり、すべてが何らかの良い点を示した。その回答は、内容に基づき筆者によって主に3つに分類された。1つ目は「子どもの心情面に関するもの」であり19人であった。「無理することなく自然に楽しめて、心の安定が得られる」、「親子で歌うことにより安心感が生まれる」、「歌を通して元気になる。優しい気持ちになるなど情操教育に良いと思う」などがあった。2つ目は「音楽に関するもの」であり、7人であった。「音楽との触れ合いを憶える」、「歌を好きになる」、「ハーモニーを楽しむことで音の楽しさを知ることができる」などがあった。3つ目は「何らかの力がつくこと」であり、5人であった。「歌詞の意味を聞いてきたりするので、心の中で情景を思い起こしながら歌っているようです。それが想像力を豊かにしてくれるのではないかと思います」、「記憶力の向上」、「気持ちを表現することができる」などがあった。これらの結果から、母親と子どもが一緒に歌うことは、子どもにとって音楽的な面よりも心情面にとって良いと考えていることが示された。

お子様の習い事について

問10「今までお子様は習い事をしたことがありますか」は、「ある」11人（男子3人、女子8人）、「ない」18人（男子11人、女子7人）であった。「ある」と回答した者（現在も習っていると11人すべてが回答）について、音楽の習い事の種類を尋ねた（複数回答可）。その結果、もっとも多かったのが「ピアノ」8人であり、その他、「音楽教室」2人、「リズムで英語」、「ジャズダンス」、「お琴」が1人ずつであった。音楽の習い事を始めた年齢は、もっとも多かったのが4歳7人であり、その他、2歳、3歳、5歳、6歳が1人ずつであった（複数の音楽の習い事をしていた対象児1人はもっとも早いもので検討した）。したがって対象児の調査時の年齢（5歳もしくは6歳）と合わせると、音楽の習い事の経験年数は4年以上5年未満1人、3年以上4年未満1人、2年以上3年未満5人、1年以上2年未満3人、1年未満1人になる。

対象児の歌唱能力

本研究は、対象児の歌った音程を正確な音程と比較して、その歌唱能力を分析している。検討箇所は41箇所であり、正確な音程で歌った箇所数が41に近ければ近いほど、正確な音程で歌えたことを示す。表1には、対象児が正確な音程で歌唱した数の多い順に示している。対象児29人の平均値は、29.45箇所（*SD*＝6.04）であった。正確な音程で歌唱した数の割合が80%以上（33箇所以上）の者は、8人（男子1人、女子7人）であった。

音楽的環境と歌唱能力の関連

表1をもとに、正確な音程で歌唱した数の上位5人（正確な音程で歌唱した数の割合が85～100%であり、以下、上位群とする）と下位5人（同割合が41～49%であり、以下、下位群とする）の音楽的環境を比較することにより、歌唱能力の違いで子どもの家庭の音楽的環境にどのような違いがあるのかを明らかにする。9つの問すべてで違いがあるわけではなく、いくつかに限定されることが分かる。すなわち「コ

ンサートに行った回数」、「カラオケに行った回数」、「歌う必要性」、「歌う意識」で違いがある。

「コンサートに行った回数」では、2回以上の者は、下位群1人であり上位群4人であった。また「カラオケに行った回数」は、1回は行ったことがある者は、下位群1人であり上位群4人であった。これらの結果から、下位群よりも上位群の方が歌唱が体験できる機会をより多く提供されていることが分かる。

「子どもと歌うことの必要性」では、「とても必要だ」と答えた者は、下位群は皆無であり上位群4人であった。また「子どもと一緒に歌うことへの意識」では、「とても良い」と答えた者は、下位群2人であり上位群5人すべてであった。これらの結果から、下位群よりも上位群の方が「母親と子どもとの歌唱」に必要性を感じ、良いことだと考えていること、つまり意識が高いことが示された。

音楽の習い事と歌唱能力の関連

上述したように、29人中11人（男子3人、女子8人）が音楽の習い事をしていた。音楽の習い事をしているかどうかで正確な音程で歌った箇所の数が違うかどうかを調べた。音楽の習い事をしている群の平均値は31.36箇所（$SD=5.94$）であり、していない群の平均値は28.28箇所（$SD=5.80$）であった。t検定の結果、両群に有意差は認められなかった（$t(27)=1.33$、$p=.20$）。

表1　対象児別の歌唱能力調査と質問紙調査の結果

対象児	性	歌唱	質問紙：母親		質問紙：子どもとの関わり					
			歌の好意度	歌う頻度	CDの数	コンサート	カラオケ	歌う必要性	歌う意識	歌う頻度
1	女	41	4	4	50	4	0	5	5	4
2	女	39	4	4	10	2～3	3～4	5	5	5
3	女	37	4	4	8	3	5	5	5	3
4	女	36	4	4	10	3	1	5	5	4
5	女	35	2	3	5	1	1	4	5	4
6	女	34	4	4	10	3	0	4	4	5
7	男	33	3	3	10	1	0	5	5	3
8	女	33	4	4	9	2	0	5	5	4
9	男	32	4	3	5	3	2	4	4	2
10	女	32	3	3	2	3	2	4	4	3
11	男	31	3	3	10	5	0	4	5	5
12	女	31	3	3	10	0	0	4	5	2
13	女	31	3	2	0	3	1	5	5	5
14	女	31	2	3	3	2	0	5	5	5
15	男	30	3	2	2	2	0	5	5	1
16	女	30	3	3	10	0	0	4	5	5
17	男	29	3	3	7	3	3	4	5	2
18	男	29	4	3	10	1	0	4	5	3
19	男	29	4	4	6	0	20～30	4	5	5
20	女	29	4	4	50	2	0	5	5	5
21	女	29	3	4	10	2	0	5	5	4
22	男	27	4	3	10	2	3	4	4	4
23	男	27	4	4	5	2	0	4	5	5
24	女	27	3	3	10	1	1	5	5	5
25	男	20	3	3	5	1	0	4	4	4
26	男	19	3	2	10	1	0	3	4	2
27	男	18	4	4	30	1	2	4	5	5
28	男	18	3	3	0	0	0	4	4	3
29	男	17	4	4	20	3	0	4	5	4

注：質問紙の項目および数値については以下を示す。
母親：『歌の好意度』…4「とても好き」、3「まぁ好き」、2「あまり好きではない」；『歌う頻度』…4「よく歌う」、3「時々歌う」、2「あまり歌わない」
子どもとの関わり：『CDの数』は家庭にある子どものためのCD（カセット）の数；『コンサート』と『カラオケ』は昨年度に連れて行った合計数；『歌う必要性』…5「とても必要だ」、4「必要だ」、3「どちらでもない」；『歌う意識』…5「とても良い」、4「良い」；『歌う頻度』は現在の状況…5「ほとんど毎日」、4「週に3～4日」、3「週に1～2日」、2「月に1～3日」、1「ほとんどない」

考　察

本研究では、母親を対象とした質問紙調査によって音楽的環境を、また幼稚園年長児を対象とした「きらきらぼし」の無伴奏歌唱によって歌唱能力を検討した。この結果に基づき、本研究の3つの目的を確認しながら考察する。

第1の目的は、幼稚園年長児の音楽的環境の特質について明らかにすることであった。本研究から、子どものためのCD（カセット）を1枚（本）は所有し（全体の93%）、コンサートに1年に1回は連れて行くが（全体の86%）、カラオケには行かない者が半数以上いること（全体の59%）が示された。母親が子どもと歌うことについては、頻度の高い者（「ほとんど毎日」と「週に3～4日」）がいる一方で、低い者（「週に1～2日」、「月に1～3日」、「ほとんどない」）もいることが明らかになった。この結果は、母親とよく歌っている子どももいれば、よく歌っていない子どももいて、子どもの歌唱体験は異なることを示していると考えられる。このような歌唱体験の違いに対応した歌唱活動が、保育において求められると考える。

また本研究から、母と子で歌うことに対して「とても必要だ」、「必要」と答えた合計は全体の97%であり、「とても良い」、「良い」と答えた者はすべてであった。ここから、きわめて多くの母親が子どもと歌うことに対して「必要である」と考えていること、またすべての母親が「良いことである」と考えていることが明らかになった。このような考えの母親に対して（必要性で「どちらでもない」と答えたを除く）、その頻度について確認したところ、「ほとんど毎日」、「週に3～4日」で頻度の高い者は19人であり、「週に1～2日」、「月に1～3日」、「ほとんどない」で頻度の低い者は9人であった。この結果は、必要であり良いことだと思うが、実際の行動に結びついていない者が少なからずいる（本研究では32%）ことを示している。換言すれば、歌うことが少ないからといって、必要ではなく良くないと考えているわけではないことを示している。この結果は、親子で歌うことの頻度のみを質問した先行研究では明らかにされなかった点であり、本研究の成果であると言える。

第2の目的は、歌唱能力が高い子どもとあまり高くない子どもの音楽的環境にどのような違いがあるのかを明らかにすることであった。本研究では、対象児のうち正確な音程で歌唱した数の多かった子どもを歌唱能力が高い子どもとし、少なかった子どもを歌唱能力があまり高くない子どもとし、比較した。その結果、歌唱能力が高い子どもは、あまり高くない子どもに比べて「コンサートにより多く参加していること」、「カラオケに行くものが多いこと」、および「母親が子どもと歌うことに対してより必要であり、より良いことだと考えていること」が明らかにされた。これらの結果から、歌唱能力が高い子どもとあまり高くない子どもの音楽的環境には、質問項目すべてで違いがあるのではなく、ある部分だけで違いがあることが示された。なお、歌唱能力が高い子どもとあまり高くない子どもでは、母親が子どもと歌うことについての意識については差があったが、実際に歌う頻度については違いはあまりなかった。この結果が、本研究の結果のみに限ったことなのかどうかは、今後の課題として検討する必要がある。

第3の目的は、音楽の習い事が歌唱能力に有益な影響を及ぼすかどうかを明らかにすることであった。本研究の結果から、音楽の習い事をしていることが歌唱の正確さに有益な影響を及ぼす可能性は低いことが示された。本研究の結果は、音楽の習い事の影響は少ないという水﨑（2007）の知見を支持するものと考えられる。

それではなぜ音楽の習い事の影響がでないのだろうか。水﨑（2007）では、その理由について「対象児の経験年数が少ないこと」と「歌を専門的に習っている対象児がいなかったこと」を挙げている。しかし、これらの情報は詳細に調べられたわけではなく、対象児からの口頭回答によるものであり、根拠としては十分ではなかった。本研究では、質問紙調査の結果をもとにこれら2つの理由を考える。まず「対象児の経験年数」についてである。対象とした対象児の音楽の習い事の経験数は、11人中9人が3年未満であった。この結果から「経験年数が少ないこと」を理由として挙げることは、妥当であると考えられる。次に対象児の「音楽の習い事の種類」についてである。音楽の習い事の種類は、「ピアノ」8人、「音楽教室」、2人「リズムで英語」、「ジャズダンス」、「お琴」が1人ずつであった。「音楽教室」に通っている者のみ

が歌を専門的に習っている者として考えられる。この結果から「歌を専門的に習っている対象児が少なかったこと」を理由として挙げることは妥当であると考えられる。

本研究では、分析対象数が少なく研究結果をすぐに一般化するのは慎重である必要がある。今後は、より分析対象数を増やし追試をする必要があると考える。

引用・参考文献

秋田喜代美（1997）『読書の発達過程－読書に関わる認知的側面・社会的要因の心理学的検討－』風間書房.

Atterbury, B. W., & Silcox, L. (1993) A comparison of home musical environment and musical aptitude in kindergarten students. *Update: Applications of Research in Music Education*, Vol.11, No.2, pp.18-22.

Brand, M. (1985) Development and validation of the home musical environment scale for use at the early elementary level. *Psychology of Music*, Vol.13, No.1, pp.40-48.

Flowers, P. J., & Dunne-Sousa, D. (1990) Pitch-pattern accuracy, tonality, and vocal range in preschool children's singing. *Journal of Research in Music Education*, Vol.38, No.2, pp.102-114.

Kirkpatrick, W. C., Jr. (1962) Relationships between the singing ability of prekindergarten children and their home musical environment. Doctoral Dissertation, University of Southern California.

水﨑誠（2002）「幼児・児童の歌唱の音程に関する研究」『教育学研究紀要（中国四国教育学会）第２部』第48巻、pp.228-233.

水﨑誠（2007）「幼稚園年長児の無伴奏歌唱の特質」『北海道教育大学紀要　教育科学編』第58巻、第１号、pp.189-196.

Persellin, D. C. (2006) The effects of vocal modeling, musical aptitude, and home environment on pitch accuracy of young children. *Bulltein of the Council for Research in Music Education*, No.169, pp.39-50.

横山真貴子（2006）「３歳児の幼稚園における絵本とのかかわりと家庭での絵本体験との関連－入園直後の１学期間の絵本とのかかわりの分析から－」『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』第15号、pp.91-99.

吉富功修（1983）「幼児の歌唱可能声域の研究－課題曲を用いて－」『愛媛大学教育学部紀要　第Ⅰ部　教育科学』第29巻、pp.257-265.

付記：本研究は、水﨑誠（2007）「幼稚園年長児の歌唱能力に家庭の音楽的環境が及ぼす影響」（日本保育学会発表）および水﨑誠（2007）「幼児の個別歌唱における音高・音程の問題（３）」（全国大学音楽教育学会北海道地区例会発表）を基にしている。なお本研究は、平成18-21年度科学研究費補助金・若手研究Ｂ（課題番号18730534）「幼児の歌唱行動の発達的研究－教育課程開発のための基礎資料の作成－」の助成を受けている。